

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：移動文学館

《こころとからだに響く出張プログラム開発編》

事業者名：財団法人せたがや文化財団
世田谷文学館

住所：東京都世田谷区南烏山1-10-10

TEL：03-5374-9111

FAX：03-5374-9120

HPアドレス：<http://www.setabun.or.jp/>



連携事業者名：世田谷区・世田谷教育委員会

会場：世田谷区立小中学校（うち、11校）

事業期間：平成21年8月13日～平成22年3月15日

1. 館の使命と本事業の関係

当館は、文学資料の収集・保管、調査研究、展示公開、教育普及という文学館の基本的な機能を踏まえつつ、世田谷区の文化創造の拠点の一つとして区民に幅広く文学に親しむ機会を提供し、次代を担う人材の育成に寄与することを使命としている。

本事業は、当館で制作した名作文学の写真パネルを活用しながら、学校教職員や保護者、地域のグループと協同でプログラムを開発し、小中学生に読書の喜びや楽しさ、可能性を伝えようとするものである。地域住民の感性を「文学」をテーマに育むという当館の大きな目的を学校空間の中で実現する事業として位置づけている。

2. 企画内容

①事業目的

当館では名作文学の写真展を小中学校で展示するアウトリーチ事業《移動文学館》を実施してきた。作品舞台の写真と物語の文章で構成したパネルの展示を活用し、学芸員と教員が連携しながら、区内在住の児童文学者、演出家、朗読グループなどの専門家を講師に招いた“こころとからだに響く出張プログラム”を開発・実施する。読書離れの懸念される小中学生に文学作品への関心を促すことを第一の目的としながら、文学館と地域のネットワークとの連携のありかたを探っていきたい。

②事業概要・実施状況

1. 世界の名作文学の写真展…全10校で開催（うち、中学校2校、小学校8校）

「アルプスの少女ハイジ」「赤毛のアン」「プリンス・エドワード島への旅」「シャーロック・ホームズの倫敦」「宮沢賢治幻想紀行」「クマのプーさんと魔法の森へ」の5種。写真展に関連した模型や人形・登場人物の衣装などの展示も行った。

2. 写真展関連出張プログラム…6校で実施（うち、中学校1校、小学校5校）。

（1）区内朗読グループと協力し、こども・教職員・保護者を対象に、宮沢賢治やシャーロック・ホームズをテーマとした朗読パフォーマンスを行なった。

（2）学芸員、教員、区内サークルが連携したおはなし会やブックトークを開催した。

3. 特別出張プログラム…小学校1校で実施

区内在住の児童文学者・末吉暁子氏、声優のあきやまなる氏らを招き、末吉氏原作のペープサート（紙の人形劇）「ぞくぞく村のゾンビのビショビショ」を上演。上演前にボランティアによる絵本の読み聞かせも行った。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

①名作文学を題材とした写真展

	学校名 (世田谷区立)	写真展テーマ	関連出張プログラム	日程 平成21年～22年
1	代沢小学校	「シャーロック・ホームズの倫敦」		8月29日～ 10月1日
2	塚戸小学校	「クマのプーさんと魔法の森へ」	学校図書館職員による おはなし会	9月17日～ 10月5日
3	桜丘小学校	宮沢賢治幻想紀行	PTAおはなしの会による 読み聞かせ	9月25日～ 10月23日
4	京西学校	クマのプーさんと魔法の森へ		10月7日～ 11月10日
5	三宿小学校	赤毛のアン・プリンス・エドワード 島への旅	教員と文学館職員による 読み聞かせとブックト ーク	10月14日～ 11月11日
6	深沢小学校	「シャーロック・ホームズの倫敦」		10月21日～ 11月18日
7	守山小学校	宮沢賢治幻想紀行		10月23日～ 11月5日
8	希望丘中学校	宮沢賢治幻想紀行		11月5日～ 1月6日
9	駒沢小学校	宮沢賢治幻想紀行	朗読パフォーマンス 「Kenji」	2月3日～ 3月3日
10	上祖師谷中学校	シャーロック・ホームズの倫敦	朗読パフォーマンス 「Holmes」	2月23日～ 3月12日

②写真展関連出張プログラム

区内羽根木に活動拠点を設ける「現代朗読協会」と協力し、写真展に関連するテーマの朗読パフォーマンスを実施した。

i) 朗読パフォーマンス「Kenji」

平成22年2月16日（火）

世田谷区立駒沢小学校

宮沢賢治がテーマの作品。体育館にて、児童・教職員・保護者370名を対象に実施。

ii) 朗読パフォーマンス「Holmes」

平成22年3月9日（火）

世田谷区立上祖師谷中学校

シャーロック・ホームズがテーマの作品。『赤毛組合』を主にモチーフとした。3年生、教職員158名を対象に実施した。



「Holmes」上演風景

③特別出張プログラム

ペープサート

「ぞくぞく村のゾンビのビショビショ」

平成22年3月9日（火）

世田谷区立千歳台小学校

作者である区内在住の児童文学者・末吉暁子氏を招き、1～3年生、教職員・児童の家族349名を対象に実施した。終演後は末吉氏と出演者らとの「ふれあいコーナー」を設け、創作の仕事に携わる専門家と児童たちとの交流を図った。



「ぞくぞく村」の概要を解説する末吉氏

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 9, 220人

内 訳：写真展観覧者 7, 509人

おはなし等参加者 805人

出張プログラム参加者 906人

(3) 事業により作成した印刷物等

②・③の出張プログラムを、音声付スライドショーとして館のHP内で公開した。

【URL】 http://www.setabun.or.jp/outreach_program/

(4) 実施事業に関する新聞記事等

上祖師谷中学校にて実施した、朗読パフォーマンス「Holmes」が東京新聞（平成22年3月10日 朝刊）に掲載された。



4. 事業の成果及び今後の課題

【事業の成果】

名作文学の写真展の鑑賞や作品の読み聞かせに加え、学校と地域の朗読グループや児童文学者、世田谷文学館の三者協力により、学校教育の通常の授業とは異なる出張プログラムを開発・実践することで、児童・生徒の作品世界への関心をより高めることができた実感している。

(1) 朗読パフォーマンス「Kenji」

宮沢賢治作品は教員から「難しい」と言われることが多いが、小学生向けにわかりやすいパフォーマンスを工夫したことで、作品のリズム感や物語のイメージを体感することができたようだ。

(児童の感想1)

「最初効果音からはじまっているから今まで見たことがなかったからおもしろかった。人間の声で効果音を入れたり、そのふん囲気にあわせてピアノの音の高さをかえたり、情景をわかりやすくよみとらせてくれました。わたしは宮沢賢治の作品は昔の人が書いたため、少し理解しづらい部分があったのですが、今回実演があったためおもしろく、やり方や工夫もあっておもしろかったと思います。」

鑑賞後、「風の又三郎」の一節「どっどど どどうど どどうど どどう」を児童たちが口ずさむ姿も見られ、楽しみながら文学作品に触れてほしいという願いは通じたかと思う。

(2) 朗読パフォーマンス「Holmes」

中学3年生に向けて制作した。やや硬質なイメージのあるホームズの世界を、楽しいミュージカル調のパフォーマンスに仕立てた。舞台装置もなく、演者の声と肉体、最小限の音響のみで表現する朗読というパフォーマンスは、鑑賞する側も五感を研ぎ澄ませて向き合わなければならぬが、生徒たちは自然体でのびのびと受けとめてくれた。

(生徒の感想2)

「特に印象に残ったのは朗読協会の方達の朗読と手や足、顔など全体で表現しているところです。私達が座っている所まで来て面白い顔や怖い顔で叫んだり、囁いたり、みんなで歩き回りながら朗読したり、おかしくて笑いながらも素晴らしいなと感心しました。難しそうだけれど一緒にやってみたいなと思いました。伴奏もぴったり合っていて、ホームズの世界により入ることができました。」

(3) ペープサート「ぞくぞく村のゾンビのビショビショ」

小学校低学年向けのプログラムである。物語の原作者と演奏家、声優や人形操作師が一体となったライブは、彼らにとっても初めての体験であり、強い印象を与えたようだ。

(児童の感想3)

「わたしはぞくぞく村のゾンビのビショビショの人形げきを見てすごくおもしろかったです。わたしは（今まで好きでなかったけれど）おばけが大すきになりました。つぎのつづきを見たいです。」

上演後、児童たちと作家や出演者が触れ合う時間もあり、また、後日図書室に作者の末吉暁子氏のコーナーが作られるなど、一過性のイベントにとどまらない意義ある催しになった。

【今後の課題】

本事業が当初目指していた①多くの小中学生に豊かな言語環境を提供する、②小中学生の感性に直接響くようなプログラムを提供する、③教職員や地域のグループと連携しながらプログラムをつくる、という目的はほぼ達成できたと思う。プログラム実演の様子をHP上で映像公開することもできた。美術や演劇の分野に比較すると、ほとんど手つかずといってよい「文学」をテーマとするアウトリーチ活動の一例には成り得たと思う。

しかしながら、現時点では文学館側からの積極的な働きかけを学校が受けてくれたという図式であり、学校や子どもたちの潜在的なニーズを掘り起こした上でのプログラムではない点が大きな課題として残る。次世代を担う子どもたちの感性を育み、思考力や表現力を伸ばすことは必須ではあるが、そのために家庭でも学校でもない地域の公的施設である文学館が恒常的に果たせる役割とは何なのか、まだ有効な解答が見つかっていない。何が求められ、どんなことなら実現可能なのか、子どもや学校へのリサーチを粘り強く続け、また館内で実施しているジュニア向け連続ワークショップとの連動も視野に入れながら、さらなる努力を続けたい。